

# 北海道紋別市における蜃気楼・海鳥クルーズの実施報告と観光化に向けた課題

石原宙・高岸ひとみ・工藤育子（北海道立オホーツク流水科学センター）

## 1. はじめに

北海道紋別市では冬季に流水砕氷船ガリンコ号Ⅱとガリンコ号ⅢIMERU による流水クルーズが代表的な観光事業として挙げられるが、夏季については現在も模索状態である。

そこで紋別市における夏季の新たな観光事業の造成として、蜃気楼・海鳥クルーズを企画、実施してきた。今回はこれまでのクルーズ事例を通し、今後の蜃気楼・海鳥クルーズの課題と要点を考察する。あわせて観光業やメディア関係者に対し、蜃気楼観光がどのような印象を持っているか等、蜃気楼観光定着化への課題も併せて報告する。

## 2. 蜃気楼・海鳥クルーズの報告

### 2-1. ガリンコ号Ⅱでいく蜃気楼・海鳥モニタークルーズ

2020年6月21日、13時30分～16時30分に紋別では初となる蜃気楼と海鳥を対象としたモニタークルーズ。同月7日に試験航海で実施した航路をもとにガリンコ号Ⅱで紋別沖約10kmを約3時間かけて航海した。46名が参加し、上位蜃気楼は見られなかったものの下位蜃気楼に加え、海鳥の大規模コロニーを観察。モニター参加のため参加料は無料とし、アンケートの協力をお願いした。併せて北見工業大学による洋上でのドローン鉛直気温観測も行った。

### 2-2. 第2回 蜃気楼・海鳥モニタークルーズ

2021年5月29日、13時30分～15時30分に昨年度に引き続き企画した。着地型観光素材の磨き上げと市民及び観光関係者に周知することを目的とした。クルーズ時間を見直し、海鳥が見られやすい5月下旬に設定したが新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。

### 2-3. ガリンコ号で行く！蜃気楼・海鳥観察クルーズ

2022年4月30日、8時30分～10時30分に図1の通り実施した。参加者は42名で蜃気楼協議会員並びに大学関係者も乗船し、さらに下船後には意見交換会も合わせて実施した。初回と同様の航路で約1時間半の航海とし、飽きることのない時間設定とした。下位蜃気楼と海鳥の小群に加え、残雪の天塩岳など当初予定していなかった景色や大気光学現象についても解説を行うことで参加者からの満足度を高めた。航海終盤に体調不良の方の治療の為緊急帰港となった。



図1 蜃気楼・海鳥観察クルーズちらし

### 2-4. ガリンコ号Ⅲ IMERUで行く！蜃気楼・海鳥観察クルーズ

2023年5月14日、8時30分～10時30分に実施した。参加者は21名でその内6割が道内参加者であった。初めてガリンコ号Ⅲによる航海となり図2のように3階デッキから紋別市街を一望できた。図3に示すように沖合約9km地点でクルーズ史上初となる、カニの爪オブジェ（全長12m）の上位蜃気楼が確認できた。オオセグロカモメやカワウ・ウミウのコロニーに加え、少数ながらケイマフリやウトウなどと言った海鳥も観察できた。乗船後に実施したアンケートでは、満足度が77%であった。蜃気楼観察やガリンコ号Ⅲによるクルーズによる高評価の意見があったものの、海鳥の遭遇が芳しくなく残念に思う参加者も見られた。



図2 ガリンコ号Ⅲから紋別市街を見る参加者



図3 紋別沖から見るカニの爪の変化

## 2-5. 蜃気楼・海鳥観察クルーズの課題

全国どこにでもあるわけではないという、地域性の高い新規観光事業は注目を浴びやすく集客に向いていることが伺える。参加者は地元民だけでなく、道内各地や関東圏からも見られた。「そこでしかない希少体験」というカテゴリーが現在の観光客の需要につながっている印象を受けた。

しかし自然対象とした観光事業には、見られなかった場合のリカバリープランの想定が不可欠であり、実際に上位蜃気楼や海鳥が見られなかった時があった。その場合の対策として、天気や雲、周りの地形や山容などを説明することで、普段地元の方も見落としていたコンテンツという内容で満足度を上げることができた。ガイドには蜃気楼・海鳥だけの専門的知識だけでなく、幅広い興味関心をもち解説できる知識と発見する経験が必要である。

## 3. 観光関係者による蜃気楼観光の反応

### 3-1. 東京都旅行業協会と遠紋地区観光関係者による情報交換会

今年2月に開催された東京都旅行業協会と遠紋地区観光関係者による情報交換会に参加した際に以下の傾向を知ることができた。

現在の観光は、建物や有名場所による集客ではなく、その地での案内やその旅でどの程度印象が残るかを重視している場合がある。すでにSNS上での情報は飽和状態であり、それ以上の経験値を顧客は求めている。その場でのアクティビティやその旅でしか得られない経験があるのであれば多少金額が高かったとしても参加する客層が増えてきている。

### 3-2. ひがし北海道素材説明会

今年4月に札幌と東京で開催されたひがし北海道素材説明会において、全37社に紋別におけるグリーンシーズン（夏季）観光を紹介した。科学センターからはこれまでの蜃気楼・海鳥クルーズの実施についても説明した。高岸と工藤が参加し、札幌と東京それぞれの観光業とメディア関係者からの反応と需要を以下にまとめる。

- ・蜃気楼・海鳥クルーズの第一印象

メディア関係からの第一印象は、興味を持ち面白そうだと反応は非常に良かったが、観光業からは、蜃気楼という言葉については知っているものの反応は芳しくない印象であった。しかし教育的テーマを交えて伝えることで興味を持たせることができた。

- ・説明した際に質問された内容

蜃気楼や海鳥の遭遇率はどの程度のものか、また万が一見られなかった際のリカバリープランを特に質問として多くうけた。また誰がガイドするか等、ガイドの有無が重要視された。

### 3-3. 考察

蜃気楼・海鳥クルーズという地域性の高い観光事業を今後展開していく上で、ツアー会社による大人数募集型のツアーではなく、個人単位のダイナミックパッケージによる事業展開が参加者のニーズに応えられる場合があると考えられる。また観光業からは蜃気楼観光だけでなく、教育を意識したパッケージが非常に有用であるとの意見が多々見られた。環境問題も併せて考えられるような経験が得られるツアーも今後のツアーに求められそう。しかしどのツアーを造成するにあたってガイド付きは必須であり、そのツアーの満足度に直結すると感じる。

蜃気楼という言葉自体は聞いたことがあるが、実際にはよくわからず見えたところでのような面白さや発見、感動があるのか等疑問視する反応もあり、未だ認知度としては低い印象を受けた。蜃気楼や海鳥観察、ガリンコ号乗船という「貴重な体験」が参加者の求めるコンテンツであると考えられる。

千葉県立中央博物館における蜃気楼を題材とした小学校での実践例<sup>1</sup>や高等学校生徒による芸術とのコラボレーション<sup>2</sup>など、観光からさらに発展させ、地元民や子供たちへ教育面からアプローチすることも視野に入れる必要が感じられた。

紋別市における蜃気楼の知名度の低さは否定できない。蜃気楼そのものが紋別市の観光コンテンツとなるためには蜃気楼発生の確率や予測技術を確立することが第一歩であり、地元民への認知度向上やSNSを用いた幅広いメディア展開による道内外問わず周知していくことが重要である。

## 参考文献

- 1) 大木淳一,長澤勇哉,清水裕子,2022: 蜃気楼を題材にした小学校・総合的な学習の時間における実践例, 令和4年度日本蜃気楼協議会研究発表会
- 2) 谷内浩, 木下正博,2022: 科学と芸術のコラボレーション～蜃気楼を教材とした教科横断的な活動～, 令和4年度日本蜃気楼協議会研究発表会